

9

尾北

岩倉市立岩倉南小学校

よしだ みさ
氏名 吉田 未沙

分科会番号 1

分科会名 国語教育（作文その他）

言葉を選び、自分の考えや気持ちを正確に伝える児童の育成

～語彙を増やす活動を通して～

1 主題設定の理由

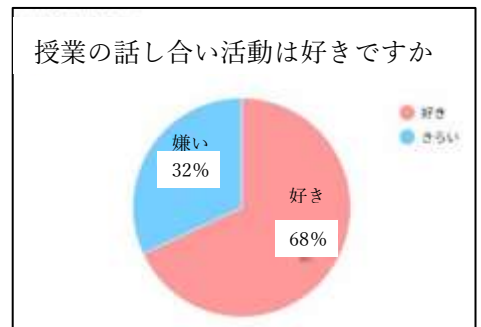
本学級は、4年生児童男子13名、女子13名で構成されている。学級の雰囲気は明るく、児童たちは気付いたことを声をかけ合って集団活動を積極的に行っている。授業中のグループでの話し合い活動では児童同士が活発に交流している様子が見られる。しかし、発表の時には、一部の児童だけが発言する傾向にある。さらに、学習のふり返りを書く際には、自分の考えを表現するのに適切な言葉が見つからず、書き終えるのに時間がかかる児童も多くいる。発達や学習に課題をもつ児童もいるため、言葉だけで伝え合うことが難しい場面もある。

一学期に行った言葉についてのアンケートの結果からは、話し合い活動が好きと答えた児童が約7割いることが分かった（資料1）。

しかし、説明するために適切な言葉が見つからず、ノートを見せて

伝えている児童が8割いることも分かった。そのため、児童がさまざまな言葉に触れ、その意味を学ぶことで、語彙を増やし、書く力や話す力を向上させることを目指した。また、絵と言葉の組み合わせることは、語彙習得に効果的であるとされているため、絵と言葉を組み合わせる新しい言葉を知る機会を設けることを考えた。

これらのことから、語彙を増やす活動を通して、自分の考えや気持ちを正確に伝える児童の育成を研究課題に設定した。



資料1 一学期に行ったアンケート

2 研究の仮説

語彙を増やすための活動をさまざまな場面で取り入れることができれば、児童の書く力や話す力が高まり、自分の考えや気持ちを正確に伝えることができるようになるだろう。

3 仮説検証の手立て

(1) 絵本の読み聞かせ

朝の読書タイムや授業で、絵本の読み聞かせを行うことで、難しい言葉も絵と意味を組み合わせると理解しやすくすることができるようにする。

(2) 言葉遊びのゲーム

普段使わない言葉を使ったしりとりなどの言葉遊びのゲームを行うことで、楽しみながら日常的に使う言葉の種類を増やすことができるようにする。

(3) 国語辞典による意味調べ

教科書などに出てくる分からない言葉や慣用句を調べるなど、国語辞典を使用する機会を設けることで、言葉への関心を高められるようにする。

4 検証方法

(1) 絵本の読み聞かせ後に行うグループでの話し合いの様子から検証する。

(2) しりとりなどの言葉遊びゲームの様子やグループ内での会話の様子から検証する。

(3) 国語辞典の活用の様子から検証する。

5 実践と考察

(1) 絵本の読み聞かせ

① 国語科の実践

1学期の国語科の「アップとルーズで伝える」の学習において対比について絵本で説明した。すると、対比の意味を早く理解でき、その後の授業でも対比を意識して読み深める様子が見られた。

「いろいろな意味をもつ言葉」の学習では、同訓異義語を学んだ。しかし、なかなか理解ができない児童がいた。そこで、言葉の意味を考えながら聞かせるために『カケルがかける』という絵本を読み聞かせた（資料2）。



資料2 カケルがかける

教科書では文章だけの説明が多いのに対し、この絵本はたくさんの「かける」という言葉が使われており、絵と意味を組み合わせた説明がされていることで児童が言葉を理解することを容易にした。

② 朝の読書タイム

朝の読書タイムで定期的に絵本の読み聞かせをすると、児童が集中して聞き、本の世界に引き込まれていく様子が見られた。また、本を読むことが苦手で集中できずにいる児童に盲導犬の絵本を差し出すと、「貸して」と読みたがる様子が見られ、専門用語を理解し、その後の盲導犬の福祉実践教室時により理解が深まった（資料3）。



資料3 読み聞かせを聞く様子

(2) 言葉遊びのゲーム

朝の学習の時間にグループでしりとりを行った。前の人が出した言葉の2文字目を使い、言葉を繋げていく活動を制限時間3分と決めて行った。しかし、しりとりの時に使い慣れている言葉ばかり使う様子が見られた。

そこで、2回目からは語彙を増やすため「文字数が多い言葉」という条件を出した。すると、「言葉を調べたい」という意見が出たため、国語辞典の使用を認めると、全員が国語辞典を使って取り組むようになった。しかし、国語辞典を使うことで1人が答えるまでの時間が長くなり、制限時間内に1人しか答えられずしりとりが成立しなかった。そのため、3回目は一人15秒という条件を追加し活動を行

った。

活動を繰り返すうちに、徐々にしりとりが成立するようになったため、グループで文字数が一番多かった言葉と意味を全体に発表するようにした。発表を聞いた周りの児童からは「その言葉、何ページに載ってるの」という質問が出るようになり、その言



資料4 発表する様子

葉を調べる様子が見られた。言葉遊びのゲームにすることで児童の言葉への関心が高まり、新しい語彙の習得に繋がった（資料4）。

(3) 国語辞典による意味調べ

① 朝の学習

9月に一人一冊の国語辞典を配付し、分からない言葉をいつでも調べられる環境を整えた。配付当初は、国語辞典を使って分からない言葉を自分で調べるという習慣がなく、友達に聞く様子が多く見られた。

グループで国語辞典を使い、動物の名前を調べる活動を行った際には、国語辞典の使い方を忘れていた児童が多く、クラス全員が引き終わるのに15分かけても調べ終わることができなかった。翌日に教師が示した言葉を辞書引きする活動を行うようにした際にも、一つの言葉を引くのに速い児童でも1分30秒かかり、クラス全員が引き終わるのに3分かかる言葉もあった。

そこで、辞書を使って言葉を調べる活動を繰り返し、調べるたびに付箋を貼るように指導した。この方法により少しずつ辞書を引くことへの抵抗が減り、児童は達成感を味わうようになった。この手立ては言葉への興味と学習意欲を一層高めたと考える。

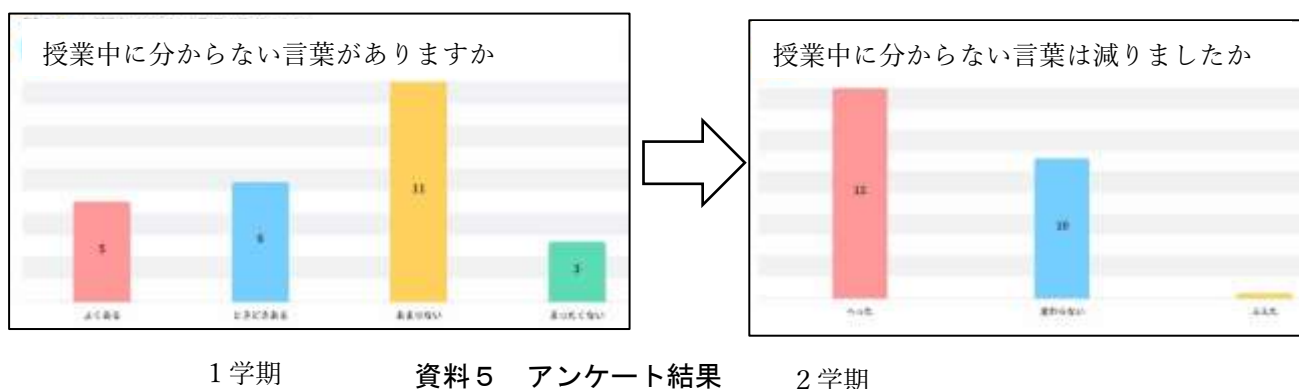
② 国語科の実践

「いろいろな意味をもつ言葉」の学習では、問題づくりとして3つの言葉を辞書引きし、付箋を貼

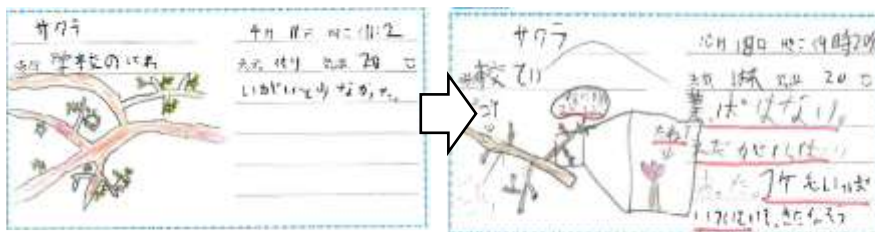
るようにした。朝の学習で辞書引きを繰り返したことで速い児童で 10 秒以内、クラス全員でも 1 分 30 秒で調べることができるようになった。

「ごんぎつね」の学習では、使い慣れない言葉が多くあったため、意味調べの時間を十分設けるようにした。調べる中で、「百姓」を調べると児童が自宅から持ってきた国語辞典には、意味の中に「農家」という言葉があり、「農家」を調べると「家畜」という言葉があるため、分からない言葉を次々に調べていく様子が見られるようになった。「プラタナスの木」の学習では、教師の指示がなくても「ごんぎつね」の学習を生かし、分からない言葉を自主的に調べる姿が見られ、辞書を使って言葉を調べる習慣が身に付いたと考える。辞書引きに慣れたことで、分からない言葉が分かる喜びを感じ夢中で調べるようになったのではないかと考える。

6 成果



語彙を増やすことで、書く力や話す力が高まることを目指して研究を行ってきた。12月に行ったアンケートの結果から「一学期と比べて授業中に分からない言葉が減りましたか」という質問に対し、「減った」と回答した児童が6割となった。「意味調べをして新しい言葉を覚えられましたか」という質問に対し、「覚えられた」「少し覚えられた」と回答した児童が8割を超えた（資料5）。児童の感想の中には「言葉は覚えれば覚えるほど楽しく



資料6 児童Cの理科ノート

なった」「もっとたくさんの言葉を覚えたい」などの肯定的な意見が挙がっていた。語彙の増加は、各教科のノートからも分かる（資料6）。

「二学期は友達に勉強を教える時に言葉で説明することができましたか」という質問に対し、「できた」と回答した児童が8割を超え、言葉を選び伝えることへの意識が高まった児童が増えたことが分かる。

年度の初めはノートを見せて自分の意見を伝える児童が多く、限られた児童の発表が中心になり、会話が続かない状況だった。しかし、その後話し合いが活発になり、本の貸し出し数も増え、児童が夢中で本を読む姿が見られるようになった（資料10）。

4月～6月 の総数 69冊	7月～11月 の総数 258冊
---------------------	-----------------------

資料10 本の貸し出し冊

これらの変化から、自分の考えや気持ちを適切な言葉で伝えるためには、語彙を増やすことが効果的であることが分かった。また、日頃使わない言葉を学び、それを実際に使ってみる機会をもつことが語彙の増加には重要であると分かった。

7 課題

12月に行ったアンケートの中で「友達に自分の思いが伝わらないと感じることがありますか」という質問に対し、「あまりない」と答えた児童が6割となった。言葉の意味を理解できたことにより、自分の考えや気持ちを発言することに対して、肯定して捉えている児童が増えた。しかし、まだ4割以上の児童が言葉を伝えることに対する抵抗感を感じていることが分かる。

本実践を通して、日常生活の中で自分の考えや気持ちを正確に伝えるためには、児童が言葉に興味をもち学習意欲を持続させ、主体的に語彙を習得し、活用する習慣を育むことが重要であると分かった。今後は、児童が言葉への興味をもち続けるための手立てを考え、彼らが未知の語彙を自分で調べる力を育てていきたい。さらに、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現する機会を学習に取り入れ、それを学級で共有できる機会を増やしていきたい。